

小田実全集（小説 第10巻）

冷え物

講談社
小田実全集
Makoto Oda

お願い

これは作者から読者へのお願いです。「冷え物」を読まれたあと、私自身が書いた「ある手紙」と、土方鉄さんが書いた『冷え物』への私の批判」をお読み下さい。ある意味では、それら二つの書きものとともに、この作品は成り立っていると考えるからです。「ある意味」の「意味」については、二つの書きものが十分に説明していると思います。

(小田実)

目次

冷え物

5

ある手紙

「冷え物」への私の批判——土方鉄

231 173

冷え物

おばあちゃんはときどき死人の真似をした。坐っていても横になつていても、急に静かになつたかと思うと手足をだらりとさせて、眼を閉じて、息をとめて、びつくりするほど長いあいだとめて、そのたびに、父と母があわててあちこち走つて、生き返つたあとで二人でかわるがわる、おばあちゃん、なんでこないなことをするねん、おばあちゃん、なんでこんな真似しはるねん。みんなして、おばあちゃん、生き返つたからだをゆさぶつてみる。それでもおばあちゃんはいつものおばあちゃんのようにただニコニコするだけで答えない。アホくさ、こっちはこないに心配して一生懸命やつとるのに。母がぼやくと父がいつものようにあわててうなずき、さらに母はつづける。ほんまに、おばあちゃん、うちらになんのうらみがあつてこんなけつたいな真似しはるねんやろ。うちなんかには判らへんで、ほんまに判らへんで。終戦後、高校も大学もアルバイトしてひとり出て、今は松下電器の係長をしているわたしの弟はそんな小さいときからまかせていて、おばあちゃん、もう今度からこんな真似したらあかへんで、とやさしく言う。その口調はのちにわたしに説教した口調とまったく同じで、やさしくてねちつこくて押しつけがましい。妹二人はまだ小さかったから、おばあちゃんの死人の真似は気に入つていて、おばあちゃん、また死んでみせてくれへんか。ほんまやで、なア、おばあちゃん。おばあちゃんは黙つてニコニコする。

おばあちゃんが死人の真似をしてみんなが大騒ぎしているあいだもそのあとも、わたしは黙つていて。父と母が、ふみ子、はよう水持つて来い、その焼酎、ちよつとふくませるのやというようなこ

とをけたたましく叫ぶのに応じてわたしも走りまわったが（ほんとうを言うと、父も母も叫ぶわりにはわたしほどは動かなかった）、わたしは何も言わなかった。わたしは気にいったときはおしゃべりで、みんながびつくりするほどしゃべったが、気にいらないとすると、何日でも黙っている。けつたいな子やな。そないに黙ってんと何か言うたらどうや、ほんまにこの子いうたら、何考えてるんか判らへん。母が父に言い、父はそやなアとあわててうなずき、それでもまだわたしが黙っているとおしまいは、また母が、気色わるい、まるでおばあちゃんみたいや、なあ、お父ちゃん、そやろ。そやな。父はまたあわててうなずく。

おばあちゃんは無口だった。近所のおばあちゃんはみんなおしゃべりでみんなして嫁の悪口ばかり言い合っているというのに、うちのおばあちゃんはいつも家のなかにおいて、三畳の片隅に坐っていて何がうれいいのかニコニコしている。近所にはおしゃべりでないおばあちゃんもいたが、そんなおばあちゃんはまちがいなく信心にこつていていつでもブツブツお経を読んでいる。うちのおばあちゃんにはそんなこともなかった。お彼岸に天王寺へ行くと、念仏踊りのおばあちゃんが舞台の上で一心不乱に踊りながらお念仏をとなえているが、うちのおばあちゃんはわたしたちといっしょに見てるだけで、おばあちゃん、どうや、上へあがつていっしょにゴニョゴニョやって来はれへんかと父が言い、そやでエ、おばあちゃん、みんなといっしょにやつて来はつたらどうです、と母がいつにない猫なで声を出して言つても、わてはここで見てますんや、と動かない。おばあちゃんはお経の文句知りらへんので。上の妹の初子がずけけ口をきく。なあ、姉ちゃん、そうやろ。初子のそのずけけ口調は今でもなおっていないくて、いいや、年をとつて来てからよけい激しくなつて来ていて、そのとき

もあんまりバカにしたような口のききようだったのでさすがに母が小さい初子の袖をひいたが、おばあちゃんはあいかわらずニコニコしたままでいて、それから口のなかでぶつぶつ、わてかて知つてます、わてのはわての在所のお経やさかい、こんなとちがうの知つてますのや。その言い方はおばあちゃんのいつものよく聞きとれないくらいのおつづつだったが、居なおつたような何かわけのわからない力がこもつていてみんなは気押されたように黙つた。

そうはいうものの、ほんとうにおばあちゃんはほかのお経の文句を知つていたのか。おばあちゃんが見死んだあと、わたしはおばあちゃんがいつも下げていた信玄袋を開いてみたが、そこには「残金参円参拾式銭也」の郵便貯金通帳と磨り減つたハンコと鼻紙が十一枚と半分折れたツゲの櫛が一つ入つているきりで、わたしが期待していたようなお経の本はなかつた。信玄袋のほかにおばあちゃんの持ち物らしいものはなんにもなかつたし、茶箱のなかに残して行つた着物のなかからもお経の本は出て来なかつたから、おばあちゃんがお経をよんでいた形跡はない。けれども、おばあちゃんはわたしがそんなふうに言うのと、また口のなかでぶつぶつ言うのにちがひなかつた。わてのは在所のお経やよつて本なんかになつてへんのだ。おばあちゃんの在所でどこやつてん。ずつとあとになつて、もう戦争が終つてからのことだが、わたしが訊ねると母は奇妙な顔をした。あの人、大阪の福島で生れた人でつせ。それが在所やねんておかしなこと言うたらあかん。福島は大阪駅のすぐわきで、にぎやかな商店街があつて、今では伊丹の空港まで行く高速道路の入口になつていて、そんなところが在所やなんてなるほどふしぎな話で、わたしは黙つてしまつた。

そのおばあちゃんがある日わたしに、ふみちゃん、あんさんもいつぱん死んだ真似しはつたらええ

ねん、とだしぬけに言った。あんまりいきなり言われたものでわたしは何も言えないで黙っていると、おばあちゃんは歯のない口をモゴモゴさせながら、いつもわてがやつてますやろ、あの通りやりはつたらええんやで。むつかしいやろ。むつかしいことなんかあらへん。ちよつとコツおぼえたらしまいやで。どんなコツや。あんなア、眼つぶるやろ、そしたらからだの力を万遍なく抜きますのやで。そこからなア、自分で今死ぬんやと思えますんやで。死ぬんや、死ぬんやと思うて、ナムアミダブツと心のなかで言いますのやで。

そないに思うたら、遠くの物音が聞えて来るとちがうか。わたしは田口先生に教わったことを思い出して口に出した。柔道三段で、そのおかげで（と先生はいつも言った）耳たぶがクチャクチャにつぶれていて、それだけでもわたしはこわかった。その耳つぶれの田口先生が国語の時間に、えらい小説家を書いていることやとやって、人が死ぬときのことを教えてくれたことがあった。なんでも人が死ぬときにはそれまで聞えて来なかつたような遠くの物音のはつきり聞えて来たり、見えなかつたものが見えて来たりする。人が死ぬときの眼は澄みわたつていて、耳もすがすがしくはればれとしていて、枕もとの線香のはせる音なんか爆弾が爆発する音みたいにきこえる。おばあちゃん、そんなことあらへんやろか。わたしはおばあちゃんが黙りこくつていたのでたちまち自信をなくしながらおらずおず訊ねた。えらい小説家ならこんなときもつと自信ありげに言うのだろうが、なにしろ、わたしはまだ死んだことがない。なア、おばあちゃん、そんな遠くの音聞えたり、何ぞ見えたりせエへんか。何にも聞えへんで。おばあちゃんはあつさり言った。同じことやで。いつもと同じものしか聞えへんで。あんさんらが走りまわる音やら、外で自動車がブーブー（おばあちゃんは「ブーブー」と言わ

ないでいつも「プープー」と言った。おばあちゃんの耳にはそんなふうに聞えたのかも知れない）いう音やな、そんなんしか聞えへんで。

それやったらいつもと同じやな。わたしは何かひどく気落ちして言った。そんなら、何か見えへん？ 何かて、なんや？ そやなア——わたしは口ごもり、口ごもつてから出まかせを言う。仏さんでも出て来はらへん？ あれは何というものか、お寺の軒にぶら下つている色とりどりの短冊のようなものがまず見えて、それから仏さんが雲にのつて降りて来る。そんなことあらへん？ あらへんで。おばあちゃんはまだすぐあつさり言う。ほんまにあらへん？ あらへんで。畳の上に落ちていたダシジャコをつまみ上げて口に入れながら、おばあちゃんほううさそうにくり返した。

仏さん見えへんやつたら、極楽は見えへんな。見えへんで。わたしはだしぬけにため息をつきたい気持ちになつてつづける。そしたら、地獄はどやろ、見えるんか。見えへんで。おばあちゃんはまた拍子抜けするくらいあつさり言った。何にも見えへんで。そんなんやつたら死んでもしょうないやないの。わたしは思わず大声を出し、出してしまつてからびくびくしながらあたりを見まわした。今にも母が起き出して、うるさいなア、寝られへんがなア、と叱りつけに来るような気がする。母がそんなふうに叫び出すとなにしる三間しかない家のことだから一家中が起きて来ることになつて、あしたの仕事にさしつかえるがな、と父がぶつぶつ言い、弟の広がまたやさしいねつとりした声で、おばあちゃん、もう寝はらんと体にわるますで。それから広はわたしのほうをむいて、姉ちゃんかてもう寝はらんとあした学校に遅れるで、と同じようにやさしいねつとりした声で言うが、声とはうらはらに、一重のわたしの眼とちがつて女の子のように二重でまつげの長い弟の眼のほうはわたしを油断なくなら

みつけている。

それでもそのときにはどうしたわけか誰ひとり起きて来ず、もう十二時近い時刻だというのにおばあちゃんは両掌で顔をこすりこすり起きていて、わたしも乗りかかった舟だ、ことばを継いで、ほんまにそれやつたら死んでもしょうがないの。おばあちゃんが黙りつづけているので、わたしはまるでそれこそ死んだおばあちゃんのからだにゆきぶりをかけるような気持で、そやろ、おばあちゃん、それやつたら死んでも……死んだらな。おばあちゃんがまるで死人が口をきくようにだしぬけに言った。あんなア、話がでけるやろ。

よう判らんで、おばあちゃんの言うこと。わたしが言っても、おばあちゃんはさすがにもう眠くなつて来たのかぼんやり薄眼をひらいてわたしを見るだけで、わたしはアホウのようにつづける。死んだら口きかれへんやろ、そやのになんで話がでけるんや。

あんなア、死んだらむくろになりますやろ。おばあちゃんはまただしぬけに言った。むくろて何やねん。ふみちちゃん、知りはらへんか、死んだ人のからだのことやで。なんや、死体のことや。死体やおまへん、むくろやで。おばあちゃんには妙にひつこいところがあつて、ときどき言い出したらきかない。それでわたしは押し黙り、おばあちゃんが口のなかでぶつぶつ、よろしか、死んだらむくろになりますやろ。むくろになつたら話しよりますのやで。むくろがなア、あんさんのまえにころがりますのやで。ころがつたら困りますやろ。それでみんな言うことときはりますのやで。

石みたいになるんやな。石みたいになつてころがりはるわけやな。わたしがうるさくなつてうなずくと、おばあちゃんは、上眼づかいにわたしを見ながら、よろしか、ふみちちゃん、むくろは石とはち

がいますんやで、と確信ありげにただ一言言い、どないちがうんや、というわたしの間にはもう答えなかった。おばあちゃんももう眼を閉じて眠り始めていて、それこそむくろのような眠り方で、寝息がたしかに鼻のあたりから聞えて来るのをたしかめるまでわたしは子供心にうろたえていた。そのとき、わたしは小学五年生で、大東亜戦争はまだ始まっていなかったように思う。

そやけど、お母ちゃん、死体と石はどないにちがうねん。昭一が言い出したことがあった。わたしが金といっしょになるために猪飼野に移って来てまだまもないころのことで、昭一はまだ小学五年生になったばかりで、わたしはまたなんでそんな話を昭一にし始めたのか。昔のことがなつかしくなっているんな話を昭一にきかせているうちについておばあちゃんのことになってしまったのにちがいない。昭一は、なんや今日はお母ちゃんようしやべるなア、どないしたんや、といつもなら金にもろくに受け答えしないわたしのおしやべりに呆れたような口をきいたが、わたし自身ふしぎで、わたし自身もとつくの昔に死んだおばあちゃんの魂が乗り移ったような気持で、よろしか、昭ちゃん、むくろと石とはちがいますんや。

そやから、どないにちがうんや。昭一はお膳の上のキムチをつまみ上げながら面倒くさげに言う。昭一には妙な癖があつて、どんなに自分で興味のあることがらをしやべつていてもそんなふうな面倒くさげなもの言い方をする。やつぱり本場のキムチやなア、口のなかが燃えよるで。昭一は大げさにハアー、ハアーと息をついた。

よろしか、昭ちゃん。わたしはおばあちゃんの口調でつづける。むくろはなア、においますのやで。石はなんにもおいませんけどな。

におう？ そやろ、昭ちゃん、死んだ人のからだはじき腐つて来ますやろ。それで、においます。石は腐ることあらへんから、におえへんけど。

そやけど、すぐ焼いてしまひよるんやろ、死体は。昭一はまたキムチをつまむ。葬式屋が来はつて、全身を消毒しはつて、けつたいな白い着物着せて、カンオケへ入れて、みんなが泣きはつて、焼き場へ行つて、焼きよる鉄の箱のなかにカンオケをほうり込んでガチャン。あとは灰や。焼き場のオッサンにチップをやつて、みんなで骨拾うて、要するに、灰や。人間つて、まあそんなもんですな。昭一は父親が死んだときはまだ小学校に入ったばかりだったが、一部始終をよくおぼえているのだ。それとも、それは、一年ほどまえ、昭一が親しくしていた友達が小児ガンで死んだときにお葬式に行き、焼き場までついて行った、そのときの一部始終かも知れない。昭一はそれだけ言つてから、またキムチをつまむ。あつ辛、口のなかが燃えよるわ。よう朝鮮人つて、こんなもん食いよるな。

焼こうと思うたかてな、昭ちゃん、あんまりようけ死体が出て来よつたら焼かれへんやろ。あつちやこつちやに死体がゴロゴロしてたら、なんにもでけへんのとちがいますか。葬式屋はんかて死んでしもうて死体になつてるか知らへんし、焼き場かて焼けてしもうてあらへん。わたしがそう言うど、昭一はわたしのほうをふりむきもしないで面倒くさげに、また空襲のときの話かいな、ようけ死んでつてんやてな。その話、わるいけどまえに聞いたことあるで、お母ちゃん。

わたしは話の腰を折られて黙つてしまふが、わたしの眼のなかにはそのごろごろがつっていた

まっ黒焦げのむくろのさまが出て来て、それはいくらもつらなつて出て来て、そのほうは昭一のことばぐらいでは消えて行こうとしない。まず見わたすかぎりの赤茶けた瓦礫のつらなりがあつて、そこに突つ立つているのは同じように赤茶けたガス管だけで、わたしはそのつらなりのなかをのろのろ歩いて工場に通つた。そんな話をしてきかせると昭一も咲子も、なんや、お母ちゃん、学校へ行かへんと工場に勤めてはつたん、と言うのだが、わたしでもあとで中退したとは言え高等女学校に通つていたのだ。高等女学校ちゆうたら今の高校のことやで。わたしはそのときそんなふうになを押しつてから、戦争が激しくなつて来ると、女学生も工場に行つて働いたんやと二人に説明した。が二人ともろくすつぽ聞いていない様子で、咲子がお義理のようにしてポツリと言つた。それで、お母ちゃん、何ぼぐらいもろてはつたん？

わたしが動員されていたのはバラシュートをつくつていた工場で、今はナイロンをつくつている工場になつてゐるらしいが、六月初めの昼間の大空襲できれいに焼けてしまつた。わたしはその日は運よく体の具合がわるくて休んでいて助かつたのだが、たくさん逃げおくれ焼けて死んで、次の日から焼跡片づけの作業が始まるとあちこちから黒焦げの死体が出て来た。わたしの組でも十人死んでしまつたのだから、そのなかにはわたしのクラス・メイトもまじつていた。五人は死体を確認することができたが、あとの五人はどこでどうなつたか判らない。身もと不詳の死体のなかにいたのにちがいないが、それをたしかめるすべもないまま、三日あとでみんなガソリンをかけて黒焦げが白い灰になるまで焼いてしまつた。

その三日のあいだ、黒焦げの死体はむし暑い空気のなかでおつた。わたしが鮭の鐘詰を嫌いになつ

たのはそのときからだだが、そのにおいはほんとうに鮭罐そつくりのにおいがした。そやかて、鮭罐てうまいで。昭一がいつだか言った。お母ちゃん食べへんのやつたら、おれ食べる。

そんなこと気にしてたら生きて行かれしまへんで。わたしの最初の夫、昭一と咲子の父親の黒木が言った。わしなんか見てみイ、シナでなア、いやほど死体のおい嗅いどるがな。便衣がな、やつて来よるな。そいつを銃剣で串刺しにしてそのままそこらへ放つておくのや。二日もしたらにおて来よるで。嘘か本当か判らない話で、わたしにはとうてい黒木にそんなことができたとは思われないのだが、黒木はそう言うてから、銃剣で突き刺す真似をした。おとなしい男で、わたしがそのころ勤めていた化粧品屋の主人から、あの人、ふみちゃんのおムコさんどうや、と話をもちかけられたときにも、わたしにはどの男の話か見当がつかかねた。それほどめだたないおとなしい男で、週に一度、化粧品会社の外勤でお店に来たときも、黒木は主人ばかりでなく家族にも店員にも万遍なく愛想をふるまうて、へえ、そうでつか、よろしま、とそんなことばかり言うていて、今思い出してみても、わたしの耳には、黒木の猫なで声と、へえ、そうでつか、よろしま、が聞えて来る。ふみちゃんみたいにおとなしい子にはあんなおとなしい人がええんやで、と横からおかみさんも口を出し、わたしはわたしで、へえ、と言つたきり黙りこくつていたが、おかみさんがそのわたしの縁談にむやみと熱心だったのは、禿頭の主人がわたしに横恋慕しはしまいかとおそれたからで、黒木と結婚して三年も経つてから、禿頭が死に、そのお通夜の帰り道で黒木からその話をきいた。おまはんかて、その気があつたんとちがうか。黒木は焼きもちやきでその口調には冗談とは思えない力がこもつていたので、アホらし、バカにせんといてエな、とわたしも即座にことばを返したが、わたしが母からもらったものだ

黒木に説明していた真珠のネックレスが実は禿頭からの贈り物であったことはおくびにも出さな
いでいた。これとつき。ある日、店の裏手に呼び出されたわたしは禿頭から長方形の筆箱のような
のを手に押しつけられ、わたしは奇妙なことに、この箱のなかにはトンボ鉛筆が入っているんやろ、
ととつきに思った。ネックレスや。おまえ首がふといけどな、まあ似合うで。おおけに。わたしは
子供のようにならずき、そのときもしおかみさんが、お父さん、と大声で禿頭を呼ばなかつたら、禿
頭はわたしを壁に押しつけてキッスぐらいいして、わたしはわたしで、黙ってそのキッスを受け入
れていたにちがいない。禿頭の掌はぼつちやりと肉のついた掌で二三度、わたしはその掌でからだの
あちこちをさわられたことがある。一度などは結婚してからのことで、おかみさんがちよつとお茶を
入れに行つたすきに、禿頭は何気ないふうにわたしの膝のあたりをなでた。

わたしは黒木におばあちゃんの話はしたことはなかつたが、黒焦げの死体のおいことだけは、
鮭罐のこともあつて黒木は知つていた。気にすることはないんやで。鉄道ではなア、死体のことはマ
グロやいうんねん。マグロやつたら、わしらいつでも平気で食うとるやないか。いつも食うてへんで
しよう、あんな高いもの。わたしも元気を出してへららず口を叩く。よう言わんわ。黒木は声をたてて
笑い、わたしも笑う。昭一も咲子もわけもわからず笑う。そうしていると、テレビ——いや、そのこ
ろはまだうちにはラジオしかなかつたので、ラジオのホーム・ドラマのような感じがして来てよかつた。
黒木は長いあいだ兵隊へ行つていて、おまけに衛生兵だったというので、何かにつけ手先が器用で、
布団のつくろいなんかわたしよりうまいほどだった。女のように細長いキャシャな指をしていて、わ
たしがまず好きになつたのは黒木の指で、たしかにその指がわたしのからだをなでまわすとき、わた

しはふるえた。わたしは声を出さないほうだったが、狭い六畳の間一間きりのアパートで親子四人で寝ていたので、用心のため黒木はわたしの口にハンカチをかませた。むろん電気は消して、した。

すんだあとでわたしの内またのつけ根にまですばやく手をのばして鼻紙をあててくれるのも黒木で、黒木はいつたいに気をつく人だった。それからくらやみのなかで左手でタバコに器用に火をつけ、くわえタバコしたまま右手でわたしの内ももをあまり熱のこもらない動作でなでる。そのうち、それにあぎると、いったん起き上つて電気をつけ、またわたしのそばによこになつて、ああ、ああ、なんぞスカツとおもろいことないやろか。

胸を叩くときもあつた。黒木の胸はうすつぺらで、叩くとペコンペコン安っぽい音がする。ゴリラみたいやな。わたしが言うとき、黒木は妙な顔をして、それからハッハッハッと高笑いする。子供が起きますがな。そやかて、おまえ、おれのことをゴリラ言いはるねんやないか。なるほどねエ、ゴリラねエ、ゴリラは胸叩きよるな。胸叩きよるけど、あれ、何ちゆうか知つてるか。何ちゆうて、何がですの。黒木はときどき子供のようにむずかるときがあつて、そんなときわたしはまるで啖子をあやすときのような声を出した。何ちゆうか言うて、そのゴリラの胸叩きのことや、それはなア、ふみ子、ドラミングいうんや。ドラムいうものがありまっしゃろ、ほれほれバンドにいつもいよるやろ、フランキー何トカが叩きよるやつや、それからできたことばやで、このドラミングちゆうことばは。高等小学校しか出ていないのに長いあいだセールスマンをしていたせいかな黒木には妙に物知りのところがあつて、よく高等女学校中退のわたしの物知らずをからかつた。そやけど、なんのためにゴリラは胸叩きはんのや。わたしが出来かせを訊ねると、黒木は生真面目な表情になつて、棚の上へのせた、こ

のあいだお大師^{だいし}さんの縁日で買って来た小さなダルマをにらんだ。そやなア、ゴリラのやつ、なんでまた胸叩いたりしよるんかな。

ダルマは一つが百五十円もした。黒木はもつと大きいのを欲しがったのだが、わたしが、アホらし、そんなもんに五百円も払われへんと言ったので、いちばん小型のにした。片方に眼が入っていて、片方の眼のところはまだまっ白。あんな、ねがいごとがかなったらな、こつちの眼入れるんや。知ってるか。アホらし、それぐらい、うちかて知ってるわ。心願成就いうわけですしやる。そやそや。

黒木の心願というのは、早く独立して禿頭のように化粧品屋の店を出すことだった。黒木とわたしはときどき思い出したようにそのプランに熱中して、店はどこぞに出したらええやろか、こないだ布施駅の近くでええ出物の店があつたけど、五坪で、わりと人通りのあるところで、というようなことからもつと实际的に、ここんとくにクリームをおいてな、ついでに婦人用の雑貨もちよつとおいてな。それからパンティイまで売つたらどうや思うてんねん。なんや、いやらしいわ、それ。そんなことあらへん、商売や。そんなことで夜おそくまでおきていることもあつた。もつともおしまいはいつでも、金ちゅうものはなかなか貯まらんものやな。力がないんやな、わしらには。そのうち、黒木はそのなけなしの力をすべてつかい果たして、この世からいなくなつてしまった。

ゴリラが胸叩くのはな、危険信号やそうやで。わたしが自分の質問をすっかり忘れてしまったところ、黒木はどこから調べて来たのかそんな新知識を披露した。よほどうれしかったのかも知れない。二人の子供を寝かせて二人きりになると、どこかほかに部屋があるわけもないから二人きりになったと言つても二人で横になつたまま眼をさましていうだけのことだが、黒木はすぐわたしに言った。

敵がジャングルのなかに来よるやろ、そしたら、すぐ叩きよるらしい。

黒木はそんなふうの説明してから、自分でも寝まきの胸をはだけて胸を叩き、それから何思ったか、コブシを天井にむかつてふり上げて拳闘選手の真似をした。ふみ子、これがジャブや。ええか、これがアッパー・カットや。これで一発かましたるんや。

かましはるて誰をかましはるねん。あとから考えてみるとわたしの言い方にケンがあつたのかも知れない、黒木は、ぎよつとしたようにわたしを見て、しばらく黙つてまるで他人を見るようににらみつけてから、あんたという人は冷たい人やな、とボソリと言つた。

そうやろか、とよせばいいのにわたしも言い、黒木は黒木で、そうや、あんたは冷たい情のない人ねんや、とくり返し、そのまま二人はにらみあいをつづけたが、そのうち咲子がむずかり出し始めて、わたしは黒木に背をむけて咲子にお乳をやつた。

それがぎつかけになつて、黒木はよくわたしに、あんたは冷たい情のない人ねんや、と言ひ始めた。はじめのうちは、わたしもそうやろかと言つてみたり、そやないでと打ち消してみたりしていたのだが、そのうちうるさくなつて、そうやそうや、どうせうちは冷たい人や、開きなおることにした。そのうると黒木も何やら拍子抜けたようにもうそんなセリフは口にしないようになったが、あとから考えてみると、黒木はもつとやさしいことばをかけてもらいたがつていたのだろう。わたしがやさしいことばをかけていれば、いまわのきわに、よし子、とそれまでわたしが一度も聞いたことのない女名前を一言つぶやいて死んでしまうというようなこともなかつたかも知れない。よし子とはいつたい何者なのか。黒木の数少ない親類縁者にも会社の同僚にも、同僚に連れられてときどき行つていたと

いう上六のバー「こねこ」にもそんな名前の女性は一人もいなくて、奥さん、何アホウなことくよくよしてはりますねん、それ、きつと、黒木はんが読んではった小説の主人公の名前でつせ、同僚の私たちは笑い、わたしもわたしで、そうでつしやろ、きつと、と笑い返すのだが、わたしはやはりしばらくのあいだは気になつて、今にもよし子という女性が訪ねて来るのではないか、赤ちゃんでも抱いて来たらどうしようかとびくびくしていた。黒木は、人ちがいででもろたんや、お恥ずかしい次第やという弁解づきで、功七級の金鷄勲章をもらつていて、黒木の口ぶりでは金鷄勲章など誰にでもくれるようなものであつたので、わたしは鏡台の抽出しのなかにクリームの空き瓶や蓋のとれたコンパクトや折れ曲つたピンカールのピンやらといつしよに入れておいた。実際たいして上等にも見えない勲章で、こんな安物もろてもしょうないやないの、生命あつてのモノダネですもんねとわたしは黒木に言い、黒木もうなずき、昭一と咲子がオモチャにして遊んでいてもわたしも黒木もとめなかつたが、お隣の板橋さんの奥さんから、なんの話のついでだったか、金鷄勲章はなかなかもらえる勲章やおまへん、えらい軍人さんかてもろてるとかぎりまへんのでと言われて黒木にそう言うと、そやさかい、人ちがいででもろた言うてるやないか。それから一月も経たないあいだに黒木が会社から気分がわるいと言つて早びきして来て、それつきり動けなくなつた。膠原病とかいうおかしな病気で、読んで字の通り、からだのなかのニカワがとろける病気なのか、現代医学では治しようもないということであつた。それで、最後に一言、よし子。黒木が死んで、そのよし子が気がかりになつて何か手がかりになる手紙でもないかと黒木の持物を洗いざらい、会社の机の抽出し、ロッカーのなかまで調べてみたが、ロッカーからわたしに見せたことがなかつた恥ずかしい写真が五枚出て来ただけで、あとは当り外れ

の馬券、「現代セールスマンの道」と表紙だけ書いてあとは白紙のままのkokoroの原稿用紙、強力総合整腸保健薬の「ワカ末」の空き瓶。写真はデンマークのものらしいと、黒木のとなりのデスクの吉本が教えてくれた。誰からもらいはったんですやろな、よう見せてはったで。へえ、奥さんは初めて。そんなもんですやろな、こんなもん、奥さんにまさか見せられへん。うちの力カアなんか、こんなもん見せたらどやしつけよる。もつとしつかりやりなはれ、言うてな。これな、なかへ入つてませんやろ。入つたら、なんぼデンマークでもあきませんのやそうで。入る寸前、そのところがよろしません。ものはなんでもそうです、なあ、奥さん。わたしは家にもつて帰つたその写真をすぐ焼こうと思つたが、なにやら惜しくなつてもつていて、結局、金にとられてしまつた。そんな写真のことなどはどうでもいい。わたしが気がかりなのは、功七級の金鷄勲章がいつのまにかなくなつていたことで、わたしはよし子の手がかりをもとめてあつちこつち調べ上げているうちにそれに気がついた。昭一も咲子も、そんなもんぼくら知らんでエ、このあいだたしかに抽出しに入つてたでエ、と口々に言い、二人の顔つきも口調もべつにウソをついているふうでもなかつたから、そうなる、やはり、黒木がもち出したことになるが、いつたい、どこへもち出したのか。よし子のところではないかという気がして、そう思うとわたしは胸がジーンとあつくなつた。三年もしたら、その勲章を胸につけたよちよち歩きの子がわたしのまえにあらわれ出て来るのではないか。わたしは気がかりで夜も眠れないとそのとき思ったが、あいにくなことにわたしは昭一と咲子を養い自分も食べて行くために働かなくてはならない。それで忙しくていつのまにかよし子のこととも記憶から薄れ、そのうち金があらわれ、三年経ち、五年経ち、今ではもう七年経っているが、どこからも金鷄勲章をつけた坊やはあらわれて来

る気配はない。それにしても、黒木はあの勲章をどこへもって行ってしまったのだろう。わたしは今でもときどき考えてみるときがあり、そのたびに裏切られたような軽い心のうずきをおぼえる。

あんたは冷たい女やと金も言った。心もからだも冷たい女やで。金はわたしのことを冷え症やと言う。はじめは、あんたがなア、布団に入つて来るときなア、あんたのからだは冷たいやろ、ことにおいどがなア冷たいんや。冷たくてなア、気持ええんや。そう言っていたのがいつのまにか、あんたのからだ、冷たいな、風邪ひくがな。もつとむこうへ行つてんか。

わたしが「ヒエモノ」ということばを金に教えてやったのはその会いはじめのころで、そのころ金はまだ金田茂という名前をわたしのまえでも使っていた。日本生れ、日本育ちの金は日本語がうまくて、よくあるように、からだのことをカラタ、おいどのことをオイトと言つたりはしない。日本語がうまいというよりそれが母国語で、朝鮮語のほうはあとで学校に通つておぼえたらしいのだが、人の話では同じ学校の日本人にはもつとうまい人がいるというほどのものであった。

そんな金のことだから、わたしが、「ヒエモノ」ということば知つてはると訊ねかけると、すぐ、それ何語やと訊ね返し、わたしが、もちろん日本語やと答えると、どない書くのやと鸚鵡返しにまた訊ね返した。

冷やこいものという意味やから、「冷え物」と書くんやろな。わたしは金にそのころいつも連れられて行つた今里の温泉マークのベッドのシーツの上に指で字を書いてみせた。今里のロオタリイの近く

のみすばらしい温泉マークで、廊下など歩くとガタピシ音をたてたが、そこにはベッドつきの洋室があつて、金はときどき洋室にわたしを連れ込んだ。

なるほどなア、冷やこいものいうわけですか。金はタバコを吹かしながら奇妙に感心したふうになつた。黒木とはちがつて金の胸は厚ぼつたく重くて、その胸の下ではわたしはつぶされそうになつた。あなたは痩せてはるな。金がはじめてそこでわたしを抱いたとき最初に言つたことばがそれで、わたしが、痩せてる女、いやでしょ、とはすつぱに言うのと、苦労したんやな、と一言言つた。

それで、どんなことやねん、それ。冷やこいもの言うとき使うんか。金はわたしのからだの上のしかかるときにはひつこくもねぼつこくもあつたが、すんでしまふときばさばと淡白で、黒木のようにわたしの内またをいつまでもなでたりは決してせず、ただ天井をむいたままむやみとタバコを吹かした。

昔のことですけどね、風呂へ入るとき、こつちが冷たいからだしてますやろ、それで失礼にあたるよつて、ごめんやす、冷え物でございませう言いはつたんやて。

誰が言いはつたんや。

昔の人や。

どれぐらい昔の人や。

さあ、江戸時代の話とちがいますやろか。

と言つてから、わたしは、そやけど、うちのおばあちゃんも風呂屋へ行くと、そんな挨拶をしていたよやと、三十年近い昔の記憶を呼び戻しながらつけ加えた。実言うとな、おばあちゃんがそのこ

とばを教えてください。はったんや。

あなたのばあちゃん、ほんまにそんなこと言うとなつたんか、風呂に入るとき。おれは聞いたことないな。

うちかてあらへん。おばあちゃんの言うのを聞いただけや。

みんな判りよつたか、そのへんの人。

さあ、どやろ、けつたいな顔してはったんやろな。昔のことやよつて、ようおぼえてへんけど。

昔で、どれぐらい昔や。

うちがまだ小学生のときやよつて……いややわ、年が知れるわね。

もう判つてゐるがな。三十四。そやけど、あなた、若う見えるで。二人の子持ちに見えへん。

あなた、うちが子供もつてること知つてはんの。

知つてゐるがな。おれはなんでも知つてゐる男やで。そやけど、そんなことたいしたことやない。おれは子供好きやよつてに、かわいがつたるで。

おばあちゃん——わたしは話題をかえた——冷え症やつたらしい。自分でそないに言うてはつた。それで、手足なんかいつでも冷たうて。風呂に入るときなんか、ほかの人にわるいと思いはつたんやろな。

あなたかつて冷え症とちがうか。手足もからだも、ほら、おいどかてこないに冷たいやないか。金はおたしのお尻に手をやつてさすつた。わたしはお風呂屋の鏡で見たことがあるが、ぶよんとたれ下つて決していいかつこうのお尻ではない。おまけに、白くもすすべもしていいのだ。蒼黒くて、鮫

肌みたいにぎらぎらしていて、わたしは自分でなでてみていやになった。

あんたも布団に入つて来るときにな、そない言うたらおもしろいのとちがうか。

どない言うの、ごめんやす、冷え物でございます。そないに言うの。

そうや。

アホらし。

わたしはおばあちゃんがわたしの寝間に入つて来たときのことを思い出していた。そのときのことというより、そのときの感触。おばあちゃんはもうそのころは心臓病で寝たきりになっていて、ものも言えない状態になっていたのに、夜、わたしが眠っている寝間に入り込んで来た。昼間の疲れでわたしはぐっすり眠っていて、森のなかへいつのまにか迷い込んでいて、それはもちろん夢だったが、わたしは突然横倒しになった樹木にけつまずいて倒れる。その樹木は細くて今にも折れそうなのに妙に節ばった樹木で、わたしの手足は樹木のその粗い表面にじかにあたつて、それがむやみと冷たくて、冷たいがな、冷たいがな、おばあちゃん。わたしはふいに夢からさめ、もう一度、大きく、おばあちゃん、と叫んだ。わたしのそばにまるでわたしにしがみつくようにしておばあちゃんが寝ていて、着せてあつた寝衣のまえがはだけで、わたしのそばにだけいて、わたしの肌はおばあちゃんのあばら骨がいちめんにごツゴツにあらわになつた肌にじかにふれていた。いや、そんなことより、わたしがまだ今でもありありと肌におぼえているのはおばあちゃんのからだの冷たさだった。それこそそれは冷え物で、ひんやりとしたものがわたしのからだじゅうを走つて、わたしはあわてて母を呼んでいた。しかし、それにしても、おばあちゃんはどうして、ごめんやす、冷え物でございませうという断わりなし

にわたしの寝間に入り込んで来たのだろう。それに、となりの三畳にひとり寝かせられていたおばあちゃんが、へっきりの襖を自分で開いてわたしの部屋に入ってきて、わたしの部屋には襖から順に初子、君子、広、わたしと四人が折り重なるようにして寝ていたのに、どうして三人に気づかれずにいちばん奥のわたしの寝床にまで達することができたのか、わたしには判らないことだらけだった。

それはねエ、姉ちゃん、業^{ごう}やで。

その事件があつてかつきり一月後におばあちゃんは死に、通夜の席でひとしきりその夜の話がはずんだあとで、どこでおぼえて来たのかそんなむつかしいことばを使って広はしたり顔に言い、わたしが黙っていると、いつものやさしい声をさらにいつそうやさしくさせて、まあ、精神力ちゆうことですな。精神力ちゆうたら、姉ちゃんも判りはるやろ。

判る。

わたしは言った。しかし、何が判つたというのだろう。それでいて、わたしはくり返す。

判るで。判るがな。

そやろ、判るやろ、そないに言うたら。

とにかく冷たかったで、おばあちゃんのからだ。

夢でそのときの記憶がよみがえつて来て、わたしはうなされたことがあつた。金がわたしの肩をゆり動かして起こしてくれた。もうそのときにはわたしは金と猪飼野の朝鮮人町のはしつこに世帯を

もつていて、金もすでに金田茂ではなく、金圭植だった。

びつくりするがな。子供が起きよるで。

金は昭一と咲子をうかがい見ながら言った。そのころの金は何かと言えば、きまり文句をくり返した。心配せんでええで、わしは子供好きやからな。

どないしたんや。

どないもせエへん。

そやけど、うなされてたで。

……おばあちゃんの夢みてたんや。

どんな夢や。

おばあちゃんがな、死にはるねん。

ふうん。

金は黙った。それつきりで、わたしが期待したように、心配することやない、もうすんだことやし、とわたしのからだを抱きかかえながらあやしてくれはしないで、仰向いて天井をぼんやり眺めている。それはいかにもひとりぼっちのしぐさで、わたしは夢のなかよりも余計さびしくなり、こわくなった。

おばあちゃん、いつ死によつてん？

戦争が始まった次の年やから、もうえらい昔のことや。

あんたはいくつやつてん？

さあ、いくつやろか。まだ、小学生やったかな。

わたしには金の考えていることは判っていた。実を言うとそのことがあるのでわたしもそんな夢をみたのだろう、金の母親が子宮ガンの再発で死んだのがつい二月まえのことで、金がそんなふうによさぎ込んだ顔で考え込むことと言えば、そのときにはまず母親の死のことだった。金はからだは大きくて力持ちだったが、父が終戦後三年目に死んだあと、母一人子一人の家庭に育ったせいもか気持には妙にやさしいところがあつて、とりわけ、なかなかの親孝行で、近所の評判もその点についてだけはよかつた。

日赤で担当の医者から廊下の片隅に呼ばれて再発ですと宣告されたあと、金はすぐ生駒山のおもとの「石切さん」へ行つた。

そやけど、ご祈禱受けつけてくれよれへんのか。

金はふさいだ顔をして帰つて来て、わたしをわざわざ家の表まで連れ出すとひそひそ声で言つた。

ガンの再発は受けつけられまへんて、こうや。

金は話しているうちに腹が立つて来たらしくひそひそ声が大声になつて行くのを、わたしは懸命におさえていた。このあたりのおしやべりどもに聞えたら、二日と経たないあいだに当の病人の耳に入るにちがいない。

そいで、どないすんの？

わたしはひそひそ声で言つた。

どないするいうて……

金は口ごもつた。

どないもしょうないやないか。

あんたは自分の出て来たところ見たことあるか。

藪から棒に金が言った。わたしがおばあちゃんの夢をみた翌日の夜のこと、金はそれからずっと母親のことを考えていたのかも知れない。

判れへんか、わしの言うてるのはな、女のアソコの話や。アソコから人間ちゅうものは出て来よるやろ。そのアソコのことや。母親のアソコのことや。

わたしが黙っていると、金はわたしのからだをいらだたしげにゆさぶりながらくり返す。

あんた、ほんまに見たことあらへんか。

あらへん。

わたしは不機嫌に答える。

そんなもん、見たことあらへんで。

ほんまか。

ほんま。

金はしばらくのあいだ黙ってから、低い声で話し始めたが、わたしの顔を見ないようにして話しているのがわたしにはよく判った。

なんでも金の母親が死ぬ数日まえのこと、そのときにはもう全身にむくみが出ていて、おなかは

人間て悲しいもんやとつくづく思った。あんな穴にみんな恋いこがれてワアワア言いよるねんやな。あんたの穴かて、わしのオバはんの穴かて女の穴で、男はみんなワアワア言いよる。

.....

この二人かて、あんたの穴から出て来よつたんやろ。けつたいな気持せえへんか。え、どやねん。べつにせえへんけど。わたしは自分ながら冷たい口調で言つた。そんなこと考えてもしよむないことやし。

わしのオバはんの腹水のことおぼえてるか。

金は話題と口調をかえた。わたしはうなづく。

ようけ出よつたな、毎日、毎日。人間つて、なんであんなにようけ水気があるんやろな。

実際、それはたくさんの量で、サイダー瓶五本も六本もたまつた。処置室とかいうところにもつて行つて、金の母親の名前を書いた紙片を張りつけておく。黄色のにごつた水で、陽の光にすかしてみると、いちめんにごミのようなものが見えた。処置室でどのような処置をすることになつていたのか、たぶんそれは看護婦が来て流しにするだけのことだつたにちがいないが、わたしはわたしよりはるかに年下の看護婦に命じられた通り、サイダー瓶をかかえては処置室へ行つた。

あんなに水気出しても、人間はしぼまんと、あんなにハリボテになつていよる。

しよつちゆう水くれ言うてはりましたで。

あまりうるさいのでわたしはときどき聞えぬふりをして、そのたびに金の母親はわたしをうらめしげに見た。

あの腹水な、あっちこっちの患者の腹水集めてな、タンクつくつたらどやろか。そんなもんつくつてどないすんの。

どないもせエへん。ただつくつて入れてみるんや。ごっついタンクがいるやろな。世界中の死にかけの病人の腹水集めたら、どれくらい量の量になるんやろ。

そんなもん毒やろ。汚ないし、危ないし……

ほんまのこと言うたろか。

金の顔がふいに輝やいた。

わしなア、オバはんの腹水なめてみたことあるんやで。

どんな味したん？

しばらく間をおいてわたしは訊ねた。

どないも味せえへん。

毒やろ、ほんまにそんなもん。

ガンがでけるでと言いかけてわたしはことばを噛み殺した。

心配すんな、わしはこうやってピンピンしてるがな。

金は笑い、それから何思ったか、わたしの穴——あそこにもそもそも右手をやった。

濡れてるで、だいぶ。

ふん。

わたしもからだを動かした。いかにもそもそもそした動きであった。

わたしと金のなれそめにも死人のかかわりあいがあった。黒木の死後わたしはまた働きに出て、あちこち会社や工場をわたり歩いたあとで、新世界のびつくりぜんざい屋の会計係にやとわれた。びつくりぜんざいというと東京の人には知らない人がいるかも知れないが、大阪の人なら、あああれでつか、とすぐ判る。大きなドンブリ鉢に大きなお餅を一つ入れて、それからどつぶりぜんざいを入れる。東京でぜんざいというと小豆のつぶつぶだけでお汁のまったくないの言うらしいが、あれは大阪では亀山と言ひ、大阪のぜんざいは東京で言うなら田舎しるこで、どろどろした甘いお汁の底に小豆が半分とけかけて沈んでいる。わたしにそんな講釈をきかせてくれたのはびつくりぜんざい屋のオヤジはんだつたが、でつぶり肥つてまるでホテイさんのようなおなかをつき出したオヤジはんに、そんなら、なんで、びつくりぜんざい言いますねん、と訊ねると、そのつき出したおなかを下からなで上げられるようにして両手でこすりながら、びつくりするほど入つてるやろ、そやよつてに、びつくりぜんざいちゆうのや。あれ食うたらけつこう飯の代りになるよつてに、釜ヶ崎のアンコなんかうちへ来てあれで昼飯の代りにしとるやつ多いで。値段のほうもびつくりサービスで安いしな。

たしかにびつくりぜんざいは量は多かつたし、値段も大きなお餅が一つ入つて五十円で安かつた。おかげでよく売れて、入口のところで焼いている餅は一日千個は確実に出る。大釜で煮たてているぜんざいのお汁のほうも何度も補充して行かなければならない始末で、食券を売るわたしも一日中眼のまわるように忙しかつた。ぜんざいのほかに、うどんもあれば寿司もあればオムライスもあれば焼き

ソバもあるというふうで、オヤジはんは、うちは食堂のデパート、びつくりデパートや、と口ぐせのように言ったが、もつともよく売れるのは、やはり、びつくりぜんぎいであった。デパートなどというのはおこがましい。冬でも吹きさらしの、昔の御堂筋の茶店のような店で、椅子もテーブルもろくなものがなかった。もうちよつと設備費を投資しはったら。社長気どりでいるオヤジはんはわたしは舌を噛みそうなことばを使って言った。うちはなア、そんな金あつたら、もつとお客さんにサービスしまつせ。うちは薄利多売や。そやよつてに、ほかの店みたいにきれいにせえへんのや。きれいにせえへんけど、うちの店のぜんぎいは安うてうもうて量も多い。そやよつてに、客は来ますのや。オヤジはんはツバキをとばしながら早口に言ったが、ほんとうのことを言うと、店をきれいにする金があつたら自分のふところのほうに入れておきたかつたのにちがいない。放つておいてもぜんぎいは売れ、オヤジはんのふところにはお金がいくらも入り、そこはよくしたもので、また出て行つた。オヤジはんには「もう古くて使いものにならんババア」までふくめてお妾さんが七人いて（わしは気がやさしいやろ。そやよつてに、手切られへんのや、とオヤジはんはよくグチをこぼした。）お妾さん以外のところに生ませたのをふくめて、もつともあれはオヤジはんの子とちがうのやないかというのでふくめてのことだが、子供が男女、老若（いちばん上のは、もう四十近い年の男で、この男は何思つたかサラリーマンになつて、ガラス会社に勤めていた）こきまぜて総計二十四人いた。

七人のお妾さんのなかにはもとお店の従業員というのが三人もいたが、わたしはオヤジはんの好みにあわなかつたらしく、わたしにむかつてけつたいな素ぶりを見せたことは一度もなかつた。今度来た会計はあんたか。まあしつかりやつてんか。それだけが初対面の挨拶のすべてで、あとで、オヤジ

さん、あんたのことをキツネつきみたいいな女が来よつたでと言うとつたで、とおせっかいな同僚が教えてくれた。わたしがキツネつきなら、オヤジはん、あんたはタヌキつきやでと内心で思ったが。鏡を見ると、もとからたいして肉づきのよくなかつた頬が黒木の死後さんさん苦労して痩せたせいこまつすぐにとがつていて、たしかにキツネのできそこないのように見えた。苦労したんやな。そのころ、わたしにそんなふうに言つて近づいて来たのが金田茂こと、金圭植だつた。

まずそこにはオヤジさんの十五番目だかの息子が死んだということがあつた。その息子は知恵のおくれた子で、もう十八になるというのに小学三年生ぐらゐの学力しかなくてオヤジはんの気がかりのタネだつたが、そんなやつかいな子ほどかわいものかも知れない、オヤジはんは猫かわいがりにかわいがつていた。それにもう一つ、その息子の母親というのがこのあいだ新入りの円顔の若くてポチャポチャしたのが来るまでオヤジはんのお婆さんのなかでナンバー・ワンだつた人で、もとは同じ新世界のバーのホステスだつたというそのお婆さんは、美人ではなかつたが四十になつてもスラリとしたなかなかスタイルのよい人で、氣だてもよかつたので、それでいつそうその彼女の一人息子のことを不憫に思ったのかも知れない。とにかくオヤジはんのかわいがりようは美談にしたいほどのもので、息子が庭の木によじのぼつてターザンみたいに吠えると、オヤジはんも同じようにべつの木によじのぼつて吠えたてる。まるでペスタロッチみたいいな話やで。学生アルバイトで来ている木村がほとほと感心したふうに言つた。

その息子が死んでしまつたのである。寝屋川の自分の家の近所をぶらぶら歩いているうちに横手からオートバイが出て来てはねとばされたという不幸な死に方で、オヤジはんが病院に駆けつけたとき

には、いまわのきわだった。ここからどれだけほんとうのことになるのか、オヤジはんの話によると、息子は苦しい息の下から、お父ちゃん、ボクはもうあかん。あかんよつてたのみ一つきいてくれるか。オヤジはんの頬には涙がたえまなく流れ、なんやねん、言うてみイ。

息子のたのみというのは、自分が死んだら、供養のためにびつくりぜんざいの一日無料サービスをやつてくれということだった。この店がなア、こんなにはやつてボくらみんながけつこうな目見させてもらとるのも、みなさんが来てくれはるからやないか。そよよつてに、一日でええさかい、お客さんに無料サービスやつたんでんか、とまあこう言いよるねんやが。オヤジはんは眼を泣きはらしながら言い、聞いていたみんなはもらい泣きしたが、息子さんがほんまに言いよつたんやろか、これオヤジはんの宣伝やないやろかとつきに思つたくせに、わたしの眼からも涙がいくらも流れ出て来るのであつた。

つまりな、これはですな、コミュニティ、つまりですな、地域社会に利益を還元するちゆうことですな。そよよつてに、息子の遺言を生かして、こんなことやりますのや。阿倍野のライオンズ・クラブの会員だけあつてオヤジはんは、噂を聞き伝えてひよこひよこやつて来た夕刊新聞の記者にそんなふうに一席ぶち、新聞記者はふんぶん仔細ありげにうなずきながら手にしたメモに何かしきりに書き込んでいたが、あとで、早速びつくりぜんざいの御馳走にあずかつて、うまいうまいと言いながらたいしてうまくもなさそうに（その証拠に、彼は三分の一ほども食べなかつた。大きなお餅も残つていて、はしつこのほうにわずかにちんまりと歯形がついていた。）ドンブリ鉢をかかえている記者の横におかれたそのメモをのぞき込むと、そこにはへノへノモへノやゴジラのようなものが縦横に描か

れているだけで、文字は何一つなかった。

それでもその翌日の朝刊の『街路灯』欄に「ぜんぎいの『無料サービス』供養」という一文がめでたく出て、オヤジはんは満足で、オヤジはんは不満があるとすれば、オヤジはんの死んだ息子の名前が出ていたがオヤジはん自身の名前はいくも出ていなかったことと、こんなことは新世界では珍しいことではなくある寿司屋の主人が死んだときにも遺言で一日無料サービスが行なわれたというくだりがあったことぐらいで、記事の末尾の「なにしろ世は宣伝時代。この供養を親心の企てとみるか宣伝とみるかは、各人の自由。お代はタダ。食べてのおかえり」という皮肉まじりの文章には、うまいこと書きよるもんやな、やつぱしブンヤはんやな、としきりに感心していた。

新聞に記事が出た次の日が無料サービスの当日で、なにしろ、びつくりぜんぎいをどれだけ食べてもタダというのだから、魔法瓶からバケツまでもち込む人がいて、たいへんな人出になった。もちろんその日にはほかの食物は一切売らないようにしてぜんぎいだけを出していたのだが、次から次へ人が来て、狭い店内はまさに戦場か大嵐の現場のような騒ぎ。よせばいいのに、お店の若い衆は店のまへの道路に出て、通行人をつかまえると次から次へ店内へ放り込むようにして押し込む。なんやねんこれ。供養でんがな、ぜんぎい供養。よろしか、ぜんぎい供養。食べて行つたつとくなはれ。この死にはったポンのためや。ごつつう食いなはれ、ホタラ、ボンも極楽へ行きはる。そんな出まかせを言いながら、若い衆は、子供を連れてカメラを下げた二人連れ、よれよれの上衣の中年男、ハチマキ姿の釜ヶ崎のアンコ、どれを見てもこれを見ても新世界へ来るお客らしくお金にえにしのなさそうな面々ばかり、次から次へ。おしまいには、外人まで来た。どこから聞いて来たのか、ドイツから無銭

旅行して来たというヒゲ面の若い男で、ゼーンザイー、と店に入るなり大声をあげた。

店へ引きずり込まれた通行人のなかには、ぜんざいなどタダでも金輪際いやや、わては辛党やで、というつむじ曲り、へソ曲りもいたが、若い衆は面白がつてその連中の口へぜんざいを流し込む。うまいでつしやる、な、酒なんかよりよっぽどよろしいやろ、酒は百害あつて一利なし、そこへ行きますと、ぜんざいは。とにかくな、これでボンも天国へ行けるいうてよろこんではりまずで。今ごろなア、仏ハンといつしよにぜんざい食べてはる、ボンはびつくりぜんざい。仏ハンはホトケぜんざい。

なかにはガンとして口を閉じて開こうとしない人もいた。それが金で、金は甘いものを口にするジンマシンが出るという。あとでいつしよに暮すようになってからわたしは金が大福餅を二つも三つもつづけて食べてそのあとべつにジンマシンを起こさなかつたのを見たから、今はそれがウソだつたとはつきり言いけることができるが、そのときにはもちろんウソだときめつけることはできない。スタモングの押し問答のあげく、若い衆の一人がわたしを呼びに来た。あそこのお客、ホラ、茶色のしよぼくれたジャンパーを着てる朝鮮人みたいな男や、あいつなア、いくら言うたかて食いよれへんねん。オバはん、行つて何か言うたつてんか。一人ぐらい食わん人がいたつてええやないの。それは困るねん、一人でもそんなやついよつたら、ボンがなア、成仏でけへんのや。若い衆はいやに確信ありげに言つた。それでやなア、オバはん、あの男にぜんざい食うように言うたつてんか。

なんでわたしにそんなことを頼んで来たかというと、あとでべつの若い衆が打ち明けたところによると、あのオバはん、キツネつきみたいな顔しとるやろ、あいつに言わせたらびつくりしてききよるかも知れへんで、というようなことで、そう言われてみれば、なるほど私にはそんなふうな神通力が

かねそなわっていたのかも知れない、私とその男——金に近づくと、それまで、わいはこんなせんざいみたいなもん食うもんか、とほぎきたてて息まいていた金はわたしの顔を見るなりギョツとしたように黙った。

あとで聞いてみると、こわい女が出て来て何を言われるのかと思つたらしい。金はいつも虚勢をはつて暮していたが内心にはそんな弱いところがあり、つまりぬことで不安がつたりこわがつたりした。そのこわい女が案外やさしい声を出し、それによく見るとキツネつきはキツネつきだが、どこかに色香があつて——そんなふうに言つたのはわたしと世帯をもつたはじめのころのことで、あとでは、アホ言え、あのときはな、わしは女に飢えとつただけのことや、と強がりと言つた。あるいは、はじめのころは、あんたはわしの初恋の女に似とるのやとも言つた。小学校の上級生だつたというそのくに子とかいう女の子とのローマンスにはなかなか変化があつて、金田茂が金圭植になつたはじめのころには、くに子は自分が朝鮮人だということを知つて嫌い出したという話がローマンスにつけ加わり、ついで、その話は、くに子は自分が朝鮮人であることを知りながらあくまで自分と行動を共にしようとし、実を言うとう自分の民族の血のめざめには彼女のそうした決意が大きく影響している、その彼女と自分との仲を生ま木をさくようにして裂いたのはくに子の両親であつたというような話に変わり、そのうち、金がわたしを棄てて行つたころには、そんなローマンスはどこにもなかつたようなことになつた。朝鮮人の男はな、やつぱしな、朝鮮人の女がいちばんなんや。これはな、男と女のことやない。民族の血と血の話や。それがな、たがいに引き合うのや。あんたにはすんまへんけど、これがかけ値なしの真実やな。初恋のときから、自分がほんとうに好きになつたのは同胞の女性であつたと金

は確信をこめて言った。そやよつてに（金は、いつしよになるまえわたしに会うためによくびつくりぜんざい屋に来ていたので、その「そやよつてに」というオヤジさんの口ぐせがときどき出た。それをぎくたびに、わたしは金と逢い始めたころのことを思い出して、からだを熱くした。やはり、わたしは金にほれていたのだ）、ふみ子さん、わしはな、やつぱし、あんたと別れたほうがええと思うんや。金は一瞬ことばを切りわたしをうかがい見るようにして見てから、それまでの確信ありげな口調とはうらはらなおおずおずしたもの言い方で、あいつのとこへ行くほうがええと思うんや。わたしが返事をしぶつているあいだに、金はほんとうにあいつ——今里のコーリア・クラブのホステス、韓京子のところへ行つてしまった。わたしと同じように頬のところがったキツネのような顔をしていたが、若くて、美人でもなんでもないが、若いからチョゴリとチマがよく似合つて、韓国の最新の流行歌がお得意さんのミス韓。

なんで、あんさん、ぜんざい食べはれへんの。

びつくりぜんざいの大きなドンブリ鉢を前にして黙っている金に、わたしはできるだけやさしい声を出して言った。

ここのぜんざい、びつくりするほどおいしいんやで。

若い衆はまわりで笑い出したが、わたしは笑わなかった。笑う代りに、これは黒木といつしよにいたころにできたくせだが、子供をあやすような眼で金を見た。

まあ、兄さん、わるいことは言えへん、食べてみいな。

わしは酒しかのまんのや。

酒は酒でのみはつたらよろしいがな。そやけど、ぜんざいはぜんざいで今食べてもらわんと困る。困る言うて、誰が困りはるのや。

ボンがなア。

わたしはことさらゆつくり言った。

困りはるのや。

ボンて誰や。

この店のこのあいだ死にはつた跡とりの息子さんや。

もちろんわたしはこのあいだ死にはつたボンが跡とりの息子でないことを知っていたが、わたしの口調は重々しげで真実らしくひびいて、若い衆も誰一人笑わなかった。

それがなんで困りはることになるんや。

ボンがなア、遺言して行きはつたんやな。わたしが死んだら供養のためにぜんざいをみんなに食べさせてやりなはれ言うてな。そしたら、自分も成仏でけるいうわけやね。そやよつてに、ここであんさんみたいに一人でも食べはらへん人がいはると、 BON は成仏でははれへん。かわいそうに成仏でけると、そこからポカリポカリ浮いてはる。

金は黙っていた。わたしは金の顔をまっすぐみつめながらつづけた。

食べてエな。

なおも金は黙っていた。わたしはさらに自分の眼の力を強めるような気持でつづける。

食べてエな。……これ、わたしが言うとするのやありませんのでつせ。死人が言うてはるのや。死人

がなア、あんさんに話をしてはんのや。

金はちらとまるでいたずらを見つけられたときの昭一のような眼でわたしを見てから、不器用な手つきで箸をもち、おもむろにアズキ色の汁のなかから大きく焼け焦げの入った餅をつまみ上げた。

ほたら、食べるでエ。

まわりの若い衆のあいだからいつせいに喚声と笑声がまき起こった。拍手までしているのがいる。オッサンなア、食べよるで。オッサン、食いよる。

わたしはとたんに、おばあちゃんの、死んだらな、話がでけるやろ、ということばを思い出していた。たしかに死んだボンは話をしたのである。

つづきは製品版でお読みください。